

第七 變 易 無 常

ミソギの行事に、「イブキ」と白すのは、天照大御神アマテラスオホミカミの天安河アマノヤスガハの神傳である。

其のイブキに、氣吹の字を充てて居るのは、「イ」の妙用であるとの義理から來たのである。イとは、氣息の義で、廣い意味での呼吸である。廣い意味でと云ふのは、私どもの肉體的に、口や鼻や毛孔などの呼吸と云ふのではなく、萬類萬物が、大宇大宙として、出入往返することを目指すのである。都べてのものが、相互に有形と化り、無形と變りつつ、相互の世界を造りつつ、まに破りつつ、變轉窮り無き活動の筋道を主る神音で、神名である。と白しますのは、大宇宙神の御活動を、日本民族は「イ」と稱へまつるのだとの義である。

日本民族の詞としては、神の稜威を仰ぎて發する音が、イなのである。

ミイズとは、本來、神としての◎を種子とし、聲こゑを體とし、其のミズの威嚴妙用を仰いて、畏みまつるが故に、イの一音を加へて・イの音が加はつて、ミイズと稱へまつらるるのである。故に、ミズは、ミイズのイが省かれたのではなく、ミズにイの加はつたのがミイズなのである。

それで、此の「イ」は、大宇宙の呼吸だと云つたならば、稍眞を傳へ得るであらうか。大宇宙の呼吸であるから、小宇宙としての萬類萬物の呼吸も、其の内に運行する。小宇宙たる私どもの

呼吸を、大宇宙の呼吸と一つにする。これが、氣吹の神傳を一言にして盡すものである。それから、「ブ」とは、^フ經・二・等の複數語で、經過運行の敏速なる意味である。「キ」の音義は、本來、凝止結晶であるが、イブキのキは、キダとか、キザムとか、キルとかのキと等しく、區切りの意を示して居る。「ブキ」の二音を「イ」に加へたのは、神の稜威が、出でては歸るのに、必、全體を築きつつ、破りつつ、一段二段と變化して行くもので、人の身の漫然と考へるような、直線的のものではないことを教へた詞である。絶對的直線と云ふものの無いことは、現代科學も證明して居るが、古典は、太古以來之れを傳へて、氣吹の狹霧と教へてある。

氣吹の狹霧とは、神の稜威で、^{生靈}三柱神として、^{玉留}無始終に、^神無際限に、神界樂土を修理固成遊ばされつつましますので、^{ヒツミ}であるから、大小長短廣狹厚薄深淺等に拘はらず、直線ではない。従つて、禊祓の行事としての氣吹も、^{イブキ}直線的ではならぬ。

前に、息を絶ると申しましたが、それは、^{フツノミタマ}經津能御魂の神儀で、^{イゲシ}五十串の祕事で、最初に、身を洗ひ清め、火食を絶ち、太陽を拜し、太月を仰ぎ、神名を奉稱して、振魂の神事を行ひつつ、漸次第と、鎮魂の境に入る。

鎮魂とは、「フツミタマ」で、^{フツヌシノカミ}經津主神の神德に導かれつつ、神國樂園を築き成すの義である。「フツ」とは祓で、祓言で、二であり經過であるのフと、一定の區域から突き出で進み行き、亦

宇氣比

多田山公秘稿

山外一塊土又是一圓光裡過客。

神の宇氣比に依るが故に、人間の身も神の完きが如く完全ならんと志し善惡邪正是非曲直を判別し得るに到るなり。

宇氣比の宇は極小の音、氣は産出にして箇體、比は日にして魂にして氷にして○にして◇にして田にして囿なれば、宇氣比とは極大極小の靈が結び成したる最大最小の神界樂土にして、又、其の主神にして司神にして狭霧にして伊吹にして三女神にして五男神にして天安河にして建速須佐之男にして月夜見月弓月讀命にして天照大御神にして御倉舉板神にして稻倉魂にして怪奇異靈の存在なり、大氣津比賣にして保食神にして豐受比賣にして、女にして芽にして目にして凹にして沃土樂地にして、

陰にして陽にして陰陽不測にして神なるなり、四象にして両儀にして太極にして無極にして極無極にして極大極小にして日止なる四象にして日月にして易なり。

和身魂にして幸身魂にして奇身魂にして咲身魂にして術魂にして、塩土翁なる九魂にして、大日本天皇たる荒身魂にして、眞身魂にして、生玉にして足玉にして玉積魂にして神魂にして高魂にして、底度久御魂にして津夫多都御魂にして阿波佐久御魂にして、大國魂にして、生嶋にして足嶋にして、大日本豊秋津根別にして、大八洲國にして八神殿にして、八尋殿にして、天御柱にして國御柱にして、神世七代にして五代にして八代にして、八百萬魂にしてミタマなるなり。

御魂にして魂にして身魂にして箇體なる宇宙にして、日にして日神にして、月にして月讀命にして、黄泉幽界にして、明闇にして零にして、十なる十字架にして、白玉身にして緋色（ひ

かり）にして、天津神にして、國津神にして、天神地祇にして綿津見にして山祇にして、國常立にして天常立にして、國常尊なる可美葦牙彦舅にてましますなり。

阿知米にして阿阿比賀天咩爾咩由宇阿伊固宇にてましますなり。

一二三四五六七八九十にして
一二三四五六七八九十百千萬にてまします三十二人供人にして
五供緒にして十種神寶にして三種神器にして三重子にして三貴子にして比咩にして比古にして神魔にして凹凸にして、如是にして如如にして如来にして、死生觀にして、生死遷流にして、不生滅にして、生不生にして滅不滅にして如如去来なりとは云へるなり。

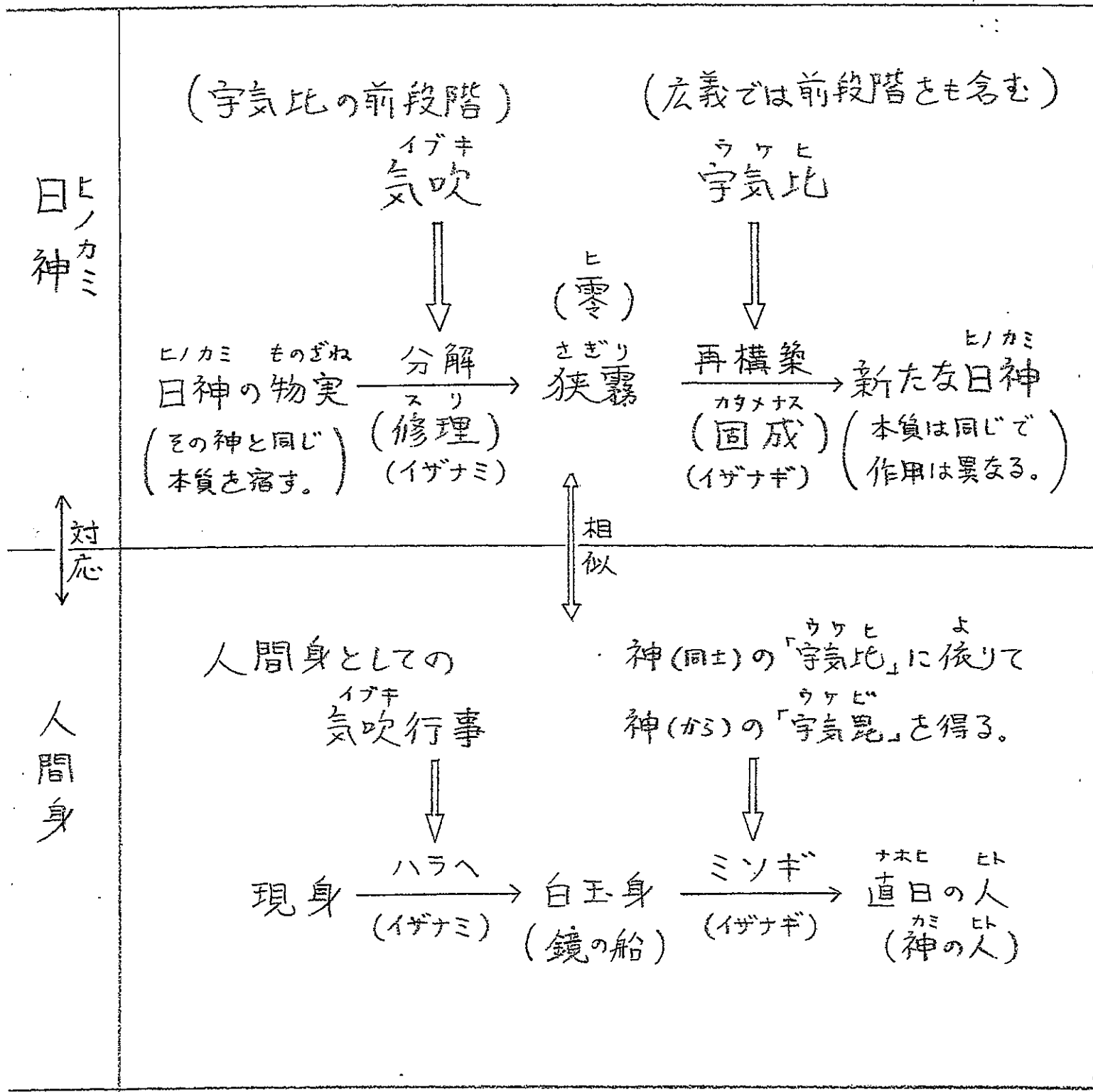
之れをヒフミなりと云ふなり

ヒフミヨイムナヤコノタリ
ヤモモチチミテリなりとは云へるなり。

以上

昭和十一年十一月十一日夜半

「イブキ」と「ウケヒ」



上段の用語は㊦147頁ほかより。

下段の用語は「日本民族の信仰」(-)より。

この「境地」を全体として
「アマノミナカヌシオホミカミ」

零の神の系譜

と云う。

造化參神の
カウリミ同士

タカミムスヒ

ノカミ

アメノミナカヌシ
ノカミ

カミムスヒ

ノカミ

カウリミ

↑
↓
ウツシオミ

同じ造化參神の
ウツシオミ同士

タカギノカミ → ヨロヅハタトヨ

アキヅシヒメノミコト

そのまた
分霊同士

アメノホアカリノミコト

ホノニギノミコト

マサカアカツカサハヤヒ

アメソオシホミニミノミコト

(零の神としての)

アマテラスオホミカミ

御統珠

サギリ → 五男神

(物実)

(零)

(新たな日神)

十拳剣

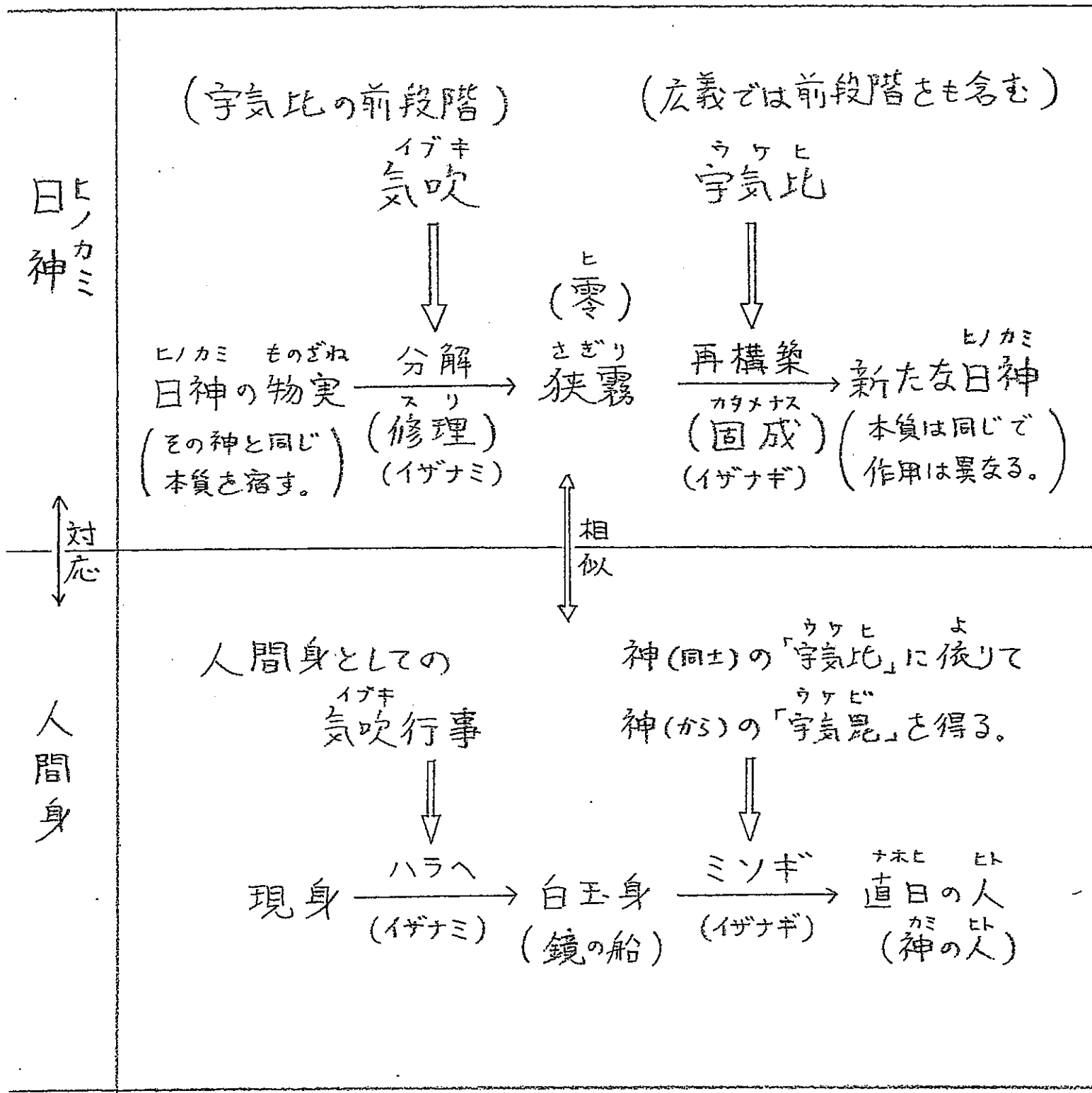
サギリ → 三女神

タケハヤスサノヲノミコト

宗像大社

五男神のうつろい

「イブキ」と「ウケヒ」



上段の用語は④149頁ほかより。

下段の用語は「日本民族の信仰」(一)より。

火神

多田山公口遺稿

作用として「火」

死者を齋ると云ふことは、分裂し分散し行く身魂をして、速に其の魂に達せしむるの義であるから、之れを「ヒノカミワザ」ミワザ」とも「ヒノカミワザ」とも「ヒノカミカカリ」とも、「スリカタメナスナルアマノヌホコノカミカカリ」とも「ヒ」とも稱するので、物で云へば燃ゆる火で、光る目で、極端なる氷で、究極の靈（ひ）で、根本の魂（ひ）で、解脱の零（ひ）で、最大最小の二で、統治統率の●◇田十　十であるから、極大で、極小で、窮数で、満数で「ヒ」だと教へられたので、其の色を云へば緋で、その相を云へば一圓相（ひかり）で、其の響を云へば一音響で、人の聴き得ざるおとたなばた人知らぬ遙遠で、本打切り末打斷ちたる天

津金木で、始終の無き始終で、非で、否で、非否で、靈（ひ）で、魂（ひ）で、産靈（むすひ）で、産魂（むすび）で、高皇産靈で、神皇産靈で、生魂で、足魂で、玉留魂で、高魂で、神魂で、生玉で、足玉で、玉留玉で、道反玉で、死反玉である。

「イナボ」と云ふのである。
日本書紀一書曰。

マタミコトノリシタマハク　タカマノハラニシラス

「又勅曰。以言高天原所御齋

ナル。ユニハノイナボモミナ　マタ　マサニ　ススミマノ

庭之穂。亦當御於吾兒。」

ミコトニ　シラサシメヨ

「齋庭之穂」とは「マツリノ二ハ」の「イナボ」であるから極大極小の零（ひ）を結び結びて宇宙を築き、宇宙を統治すべきなりとの義である。

齋庭（ゆには）とは「ミタママツリ」で「齋」である。

之れを「メノカミワザ」とも

「ヒメカミワザ」とも稱するので、「イナシコメシコメキ」で醜女で、醜の又醜の醜の極であ

る大醜で、大美女なのである。
「亦當御於吾兒」とは、大直日の如く、直日の徳を明にすべしとの義である。

齋庭秘言一圓相。

皇子皇孫一音響。

眼耳鼻舌一空零。

随縁起滅一天命。

ひふみよいむなやここのたり
やももちちみてり。

あちめ　あうを。

う。う。う。う。う。と。う。

◇

「稲羽素菟」とは、「イナバ」なる正しき資料にして、「シロウサギ」とは「ウサギ」にして極小の結びたる身なりとの義なるなり。

極小の結びたる身なりとは、

「ウト」にして神聖なり。

之れを「カミナガラ」とたたへて「カム」なり。

「カミノマニ」にして神人なり。

り。

以上

昭和十一年七月十四日夜半

「ヒ」の意味とその表現について

零^ヒ——時空や万物を構成する根本資料としての「実在」そのものを指す名称。

日^ヒ——その「実在」が「中心」として機能している際の名称。「統一^ヒ体」全体を指す場合もある。

↓極、唯一点、種子^{タネ}、、光^{ヒカリ}、日神^{ヒノカミ}とも。

火^ヒ——その「実在」が単なる「資料」としてしか機能していない状態の名称。

「中心」に付随してその「外郭」を構成するか、さもなくば遊離して「魔^{マガツル}」となる。

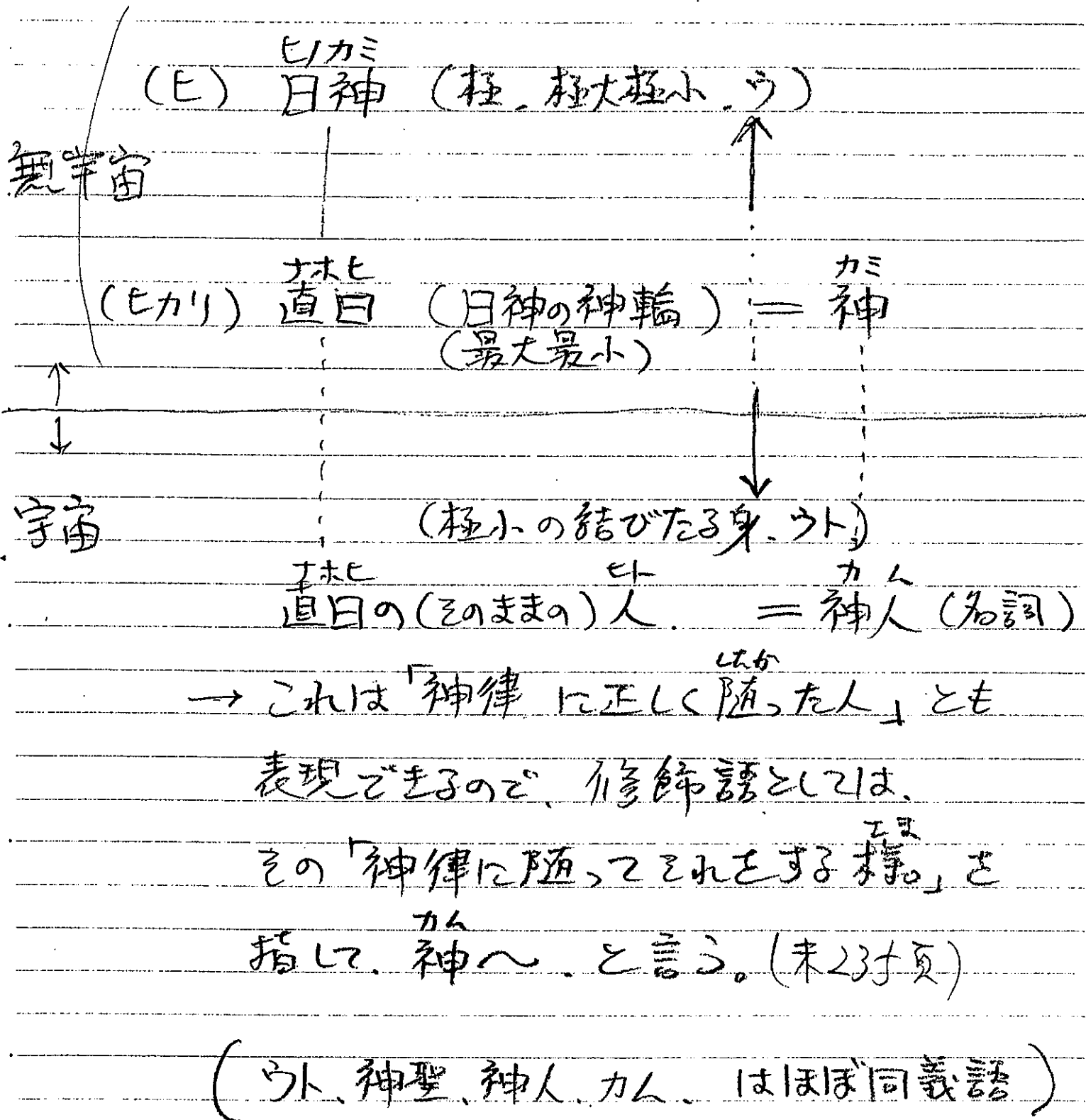
イナボ——「種子」と同義。極大極小の零（ヒ）のことを「種子」とも言い、「斎庭之穂」（マツリノニハの

イナボ）とも表現する。

イナバー正しき資料のこと。

万物は「中心」より出でて「中心」に帰る。その「中心」を「ヒ」と呼ぶが、同時に、その出たり帰ったりする際の「一貫した筋道」をも「ヒ」と称する。

人間にこの「ヒ」を教えるが、^{フルタマノミコト}振魂尊^{アマテラスオホミカミ}こと天照大御神の御神徳である。^{ミハタラキ}



三 二つの小分け(彫片)に折って、
六 剣とは無関係な「瓊の音も玲瓏と」という
形容があるのは、後の文
に引かれた不用意の挿入
であろう。
2 天の安の河の
誓約

七 書紀には「天渟名

(アザノ井)、別名「去来之真名(イザノ井)」とある。

名義未詳。井は用水を汲む所の意で、この井は

安の河の中の井と見るのが穏やかであろう。

八 振りには接頭語、滌ぐは洗い清める意。

九 書紀には「齟然咀嚼」とある。「さ」は接頭

語、嚙みに嚙んでと語を重ねて動作を強めた表

現。

一〇 吐き出す息吹の霧の意。雄略紀には「呼吸

氣息(イブキ)、似於朝霧。」とある。

二 書紀には「田霧姫命」とある。霧のキは乙

類の仮名であり、紀も乙類であるから、霧に因

んだ神名であろう。多(田)は接頭語か。

三 沖の島に坐す女神の意。

四 書紀には「市杵(キチ)島姫」とある。イチキ

はイツキ(斎き)の転音ではあるまいか。

五 船の寄る所に坐す女神の意。

六 書紀には「湍津姫」とある。早瀬の女神。

七 正勝は正しく勝った、吾勝は私は勝った、

勝速は素早く勝ったの意。日は太陽に因んだ名、

忍穂は多し穂で豊かに稔った稲穂、耳は尊称で

あろう。

八 書紀には「天穗日命」とある。これも稲穂

と太陽に因んだ神名であろう。

九 天つ日、即ち太陽の子の意。根は親愛の意

をあらわす接尾語。

一〇 生き生きとした日の子の意。

一一 熊野は地名。久須毘はクシビ(奇霊)と同義。

答へ白ししく、「各宇氣比て子生まむ。」とまをしき。宇より以下の三字は音を以て。下は此れに効へ。

故爾に各天安河を中に置きて宇氣布時に、天照大御神、先づ建速須佐之男命

の佩ける十拳劍を乞ひ度して、三段に打ち折りて、奴那登母母由良爾、此の八字は音を以て。

此れに効へ。天の眞名井に振り滌ぎて、佐賀美邇迦美て、佐より下の六字は音を以て。吹き棄

つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、多紀理毘賣命。此の神の名は音を以て。亦の御名は奥津

島比賣命と謂ふ。次に市寸島上比賣命。亦の御名は狹依毘賣命と謂ふ。次に多

岐都比賣命。三柱。此の神の名は音を以て。速須佐之男命、天照大御神の左の御美豆良に纏かせ

る八尺の勾瓊の五百津の美須麻流の珠を乞ひ度して、奴那登母母由良爾、天の

眞名井に振り滌ぎて、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御

名は、正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命。亦右の御美豆良に纏かせる珠を乞ひ度し

て、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、天之菩牟能

命。菩より下の三字は音を以て。亦御縋に纏かせる珠を乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄つ

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、天津日子根命。又左の御手に纏かせる珠を

乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、活

津日子根命。亦右の御手に纏かせる珠を乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄

つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字は音を以て。并せて五柱な

觀門の見方

ミイツ
→ サキリ

空なる實在（神の授威の二とて、極、無極、極大極小と表現）
裏↓無宇宙

表↓圓體

表の表↓大宇宙

裏の裏↓點

裏の表↓零

表の裏↓直日

表と裏を合せると↓ニ↓経↓◎↓◎↓三↓身↓一↓◎↓
火經身↓日止↓完全圓成の宇宙である圓體である

五 二つの小分け(彫片)に折って、
六 剣とは無関係な「瓊の音も玲瓏と」という
形容があるのは、後の文
に引かれた不用意の挿入
であろう。

2 天の安の河の 誓約

七 書紀には「天津名

(アマノナメ)井」、別名「去来之真名(イザナノナメ)井」とある。

名義未詳。井は用水を汲む所の意で、この井は
安の河の中の井と見るのが穏やかであろう。

八 振りは接頭語、滌ぐは洗い清める意。

九 書紀には「斷然咀嚼」とある。「さ」は接頭
語、噛みに噛んでと語を重ねて動作を強めた表
現。

一〇 吐き出す息吹の霧の意。雄略紀には「呼吸
氣息(イハキ)、似於朝霧。」とある。

二 書紀には「田霧姫命」とある。霧のキは乙
類の仮名であり、紀も乙類であるから、霧に因
んだ神名であろう。多(田)は接頭語か。

三 沖の島に坐す女神の意。

三 書紀には「市杵(イチキ)島姫」とある。イチキ
はイツキ(斎き)の転音ではあるまいか。

四 船の寄る所に坐す女神の意。

三 書紀には「湍津姫」とある。早瀬の女神。

六 正勝は正しく勝った、吾勝は私は勝った、
勝速は素早く勝ったの意。日は太陽に因んだ名、
忍穂は多し穂で豊かに稔った稲穂、耳は尊称で
あろう。

七 書紀には「天穗日命」とある。これも稲穂
と太陽に因んだ神名であろう。

八 天つ日、即ち太陽の子の意。根は親愛の意
をあらわす接尾語。

九 生き生きとした日の子の意。

一〇 熊野は地名。久須毘はクシビ(奇霊)と同義。

答へ白ししく、「各宇氣比て子生まむ。」とまをしき。宇より以下の三字は音を以
るよ。下は此れに效へ。

故爾に各天安河を中に置きて宇氣布時に、天照大御神、先づ速須佐之男命
の佩ける十拳劍を乞ひ度して、三段に打ち折りて、奴那登母母由良爾、
此の八字
は音を以

此れに效へ。天の眞名井に振り滌ぎて、佐賀美邇迦美て、
此の神の名は
音を以るよ。吹き棄

つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、多紀理毘賣命。此の神の名は
音を以るよ。亦の御名は奥津

島比賣命と謂ふ。次に市寸島上比賣命。亦の御名は狹依毘賣命と謂ふ。次に多

岐都比賣命。三柱。此の神の
名は音を以るよ。速須佐之男命、天照大御神の左の御美豆良に纏かせ

る八尺の勾璫の五百津の美須麻流の珠を乞ひ度して、奴那登母母由良爾、天の

眞名井に振り滌ぎて、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御

名は、正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命。亦右の御美豆良に纏かせる珠を乞ひ度し

て、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、天之菩卑能

命。菩より下の三字
は音を以るよ。亦御縋に纏かせる珠を乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄つ

る氣吹の狹霧に成れる神の御名は、天津日子根命。又左の御手に纏かせる珠を

乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、活

津日子根命。亦右の御手に纏かせる珠を乞ひ度して、佐賀美邇迦美て、吹き棄

つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字
は音を以るよ。并せて五柱な

つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字
は音を以るよ。并せて五柱な

つる氣吹の狹霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。久より下の三字
は音を以るよ。并せて五柱な

名義未詳。
目と目を見合わせて（心を通じる意）。

蛇を撥う呪力をもった領巾。領巾は上古女頭にかけて左右に垂らしたもので、今のマ一のようなもの。旧事本紀を見ると、饒速の天降の時、天神から授けられた瑞宝十種に、「蛇比礼」と「蜂比礼」がある。

おっと（夫）の意。ヒコは男、ヂは男性を示尾語。

振つての意。

翌朝、蛇の室からお出になった。

翌日。

蜈蚣の略字。

鏑のついた矢で、空中を飛ぶ時、鏑の穴に入って鳴るので鳴鏑という。鳴鏑は漢語

に。

ぐるっと周囲を焼いた。

どこから遁れ出てよいかわからなかった時。

内部はうつろで、外部は窄（せま）んでいる。

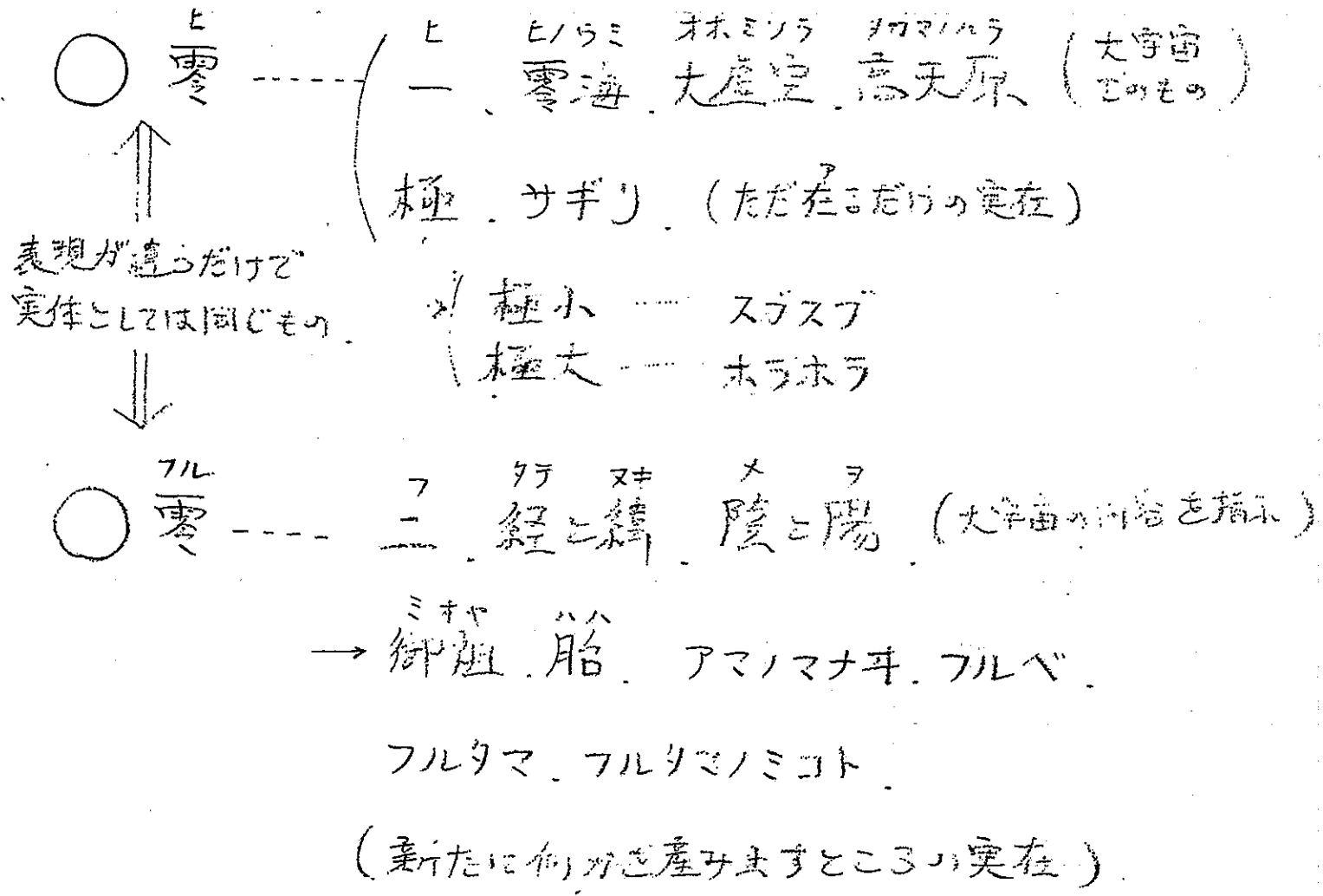
そのほら穴の中に落ちて、身体が隠れ入っ

に、火は穴の外を焼け過ぎた。

夫は死んだと思って、葬式の道具を持って。

所に参到れば、其の女須勢理毘賣出で見て、目合爲て、相違ひたまひて、還り入りて、其の父に白ししく、「甚麗しき神來ましつ。」と告りたまひて、即ち喚び入れて、神出で見て、「此は葦原色許男と謂ふぞ。」と告りたまひて、其の蛇の室に寝しめたまひき。是に其の妻須勢理毘賣命、蛇の比禮（二字は音を其に）の夫に授けて云りたまひしく、「其の蛇咋はむとせば、此の比禮を二たび舉りて打ち撥ひたまへ。」とのりたまひき。故、教の如せしかば、蛇自ら靜まりき。故、平く寢て出でたまひき。亦來る日の夜は、吳公と蜂との室に入れたまひしを、且吳公蜂の比禮を授けて、先の如教へたまひき。故、平く出でたまひき。亦鳴鏑を大野の中に射入れて、其の矢を採らしめたまひき。故、其の野に入りし時、即ち火を以ちて其の野を廻し燒きき。是に出でむ所を知らざる間に、鼠來て云ひけらく、「内は富良富良、（此の四字は音を以てよ）外は須夫須夫、（此の四字は音を以てよ）」といひき。如此言へる故に、其處を蹈みしかば、落ちて隠り入りし間に火は焼け過ぎき。爾に其の鼠、其の鳴鏑を咋ひ持ちて、出で來て奉りき。其の矢の羽は、其の鼠の子等皆喫ひつ。

是に其の妻須世理毘賣は、喪具（一四）を持ちて、哭きて來、其の父の大神は、已に死にぬと思ひて其の野に出で立ちたまひき。爾に其の矢を持ちて奉りし時、



「ヌサトモモエウ、サガミニカミ」 修理固成の意味
即ち「箇体と一度 サギリ に戻して、また新たな箇体を形成する。
クラ^{クラ}とスギ^{スギ}とを組み合わせ、万物を産み出す」という意味。
こうして産み出された 箇体は ○^{ヒカリ} と図示される。

(『言霊の幸』 90-91頁、149-150頁、274頁、ほかより抜粋)

萬葉集講話(二)

多田雄三

暴風だ、猛雨だ、雷鳴だとか、鳥歌、獸聲、海音、泉聲、松籟、鬼笑、神韻とか、天音と称へ、玉音と呼ぶも、皆共に音聲である。

その音聲は、人の聞き知るところで、別に不思議はない。

假令、電話とか、ラヂオとか云ふように、機械の力を借るとしても、音聲といへば、人は聞くべきものと決めて居る。

また聞きつつあるので、聲聞僧の圖を古人が書いたものにも、海岸に立ち潮音に対する意味を示して居る。

けれども、海潮音は梵音で、梵音とは妙音觀世音で、それは、「其ノ音聲ヲ觀テ、皆共ニ解脱ス。」と説明してあるとほりで、

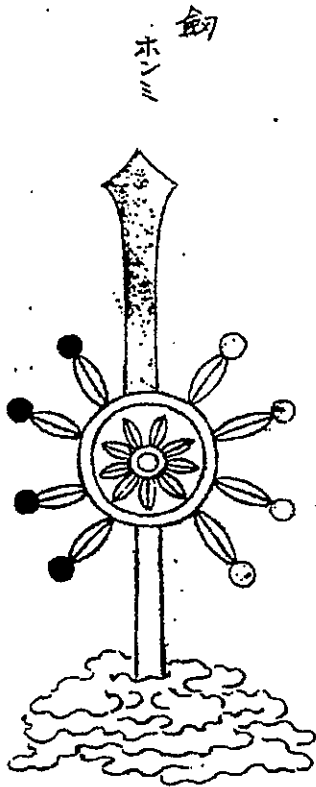
音聲を觀て、解脱悟證するのである。

これが「サトリ」で觀世音で佛で浄土なので、一音響で一圓相だと教へたのが佛佛相傳

の祕言靈で、大宇宙の大中心との義である。

その大宇宙の大中心は、「名無キハ天地ノ始、名ハ

八握劍



山多田雄三先生の筆蹟

すべてのもの はじめ 萬物ノ母。」と指示したところの、無名と有名との一音響で、一圓相なので、それを、「初二

言存り、言ハ加美ナリキ。」

と傳へた「言」で「加美」で、

同時に、「初二光存り、光ハ加

美ナリキ。」と教へたところの

「光」で「加美」であるところ

の「日」となすので、極大で

極小で極小で極大であるところ

の極大極小で、極で無極で無極

であつて極であるところの極無極で、盡天盡地の「ヒ」で無際無涯の「ヒ」で唯一不可分の「ヒ」で如如去來の「ヒ」で成住壞滅

の「ヒ」であるところの「命」で

「尊」で「天祖」で「日止」

で「火止」で「火」で「日」で

「天津神」で「國津神」で「加

美」で「加牟」であるとの意である。

目には一圓相で、耳には一音響で、その機能に應じて名を異にし用を別にするのである。

音聲は音聲でも、鳥獸の音聲は、人類の聞き分け難しとするところで、風雨雷霆の音響は、なほさら、人には判別が付かぬのと等しく、萬類萬物の相違分別なのは、各類各界は各類各界としての構成を各別にしてあるから各類があり各界があるのである。

此の類別は、内容でもあり外形でもある。

それと等しく、歌詞の類別も、内容の相違と共に外形もまた異なるは當然である。

大宇宙の大中心としての事実と眞理、仏徒の所云、事と理、事理不二。

これを觀自在身と呼ぶことができる。

觀自在身といふのは、大悟徹底の身で、解脱身であるから、古人はこれを、白玉とも白玉楼ともいって、支那文字では、皇と書いてある。

皇は白玉の合成で、水精宮の義である。

また、国とも書く。

□と玉との合成で、白玉楼閣の義である。

宇内の意で、築成建国を教へてをる。

□は宇宙で、經と緯とで、經は緯で緯は經であるところの極大極小なると共に、經のあるのは緯のあるので緯のあるのは經のあるので、つまり、宇宙で、

宇宙とは經緯であるから、箇體で、各類で、各界で、大小長短明闇美醜正邪曲直と千様萬態なのである。

其の千様萬態であるところの

宇宙を、明瞭瞭に照觀し得るところの箇體であるとの意味で、

□の中に玉を置いたのである。

白玉楼閣であるから、浄土なので、皇土なので、高天原で、天國である。

これを觀自在身と呼ぶ。

觀自在菩薩といふに等しいのである。

日本民族の傳へて來た言靈の「ナホビ」に、この觀自在菩薩といふ名は相當するので大宇宙の大中心といふ義になるのである。

大宇宙の大中心といふのは、箇體無き箇體といふ義なので、無宇宙の宇宙なので極大極小なので、一音響で一圓相なので、

世界無き世界、人無きの人なのである。

人無きの人は、其の實體を

命と呼び、其の妙用を尊と称するので、支那文字を借りて二

様に表現したので、日本語のみ

ならば、「アメノミオヤ」が命

で、「ミコト」は尊の字を用ゐ

たのに當るのである。

それは丁度、佛の語が「アメノミオヤ」に當るのに對して、觀世音菩薩の義が「ミコト」に當ると等しき關係である。

それだから、佛とは大宇宙で、

觀世音菩薩とは大宇宙の大中心としての宇宙であるところの觀自在身である。

その觀自在身であるところの「ナホビ」といふのは、事實と眞理との不二一體である「アメノミオヤ」の妙用であるから、

二重相で一圓相で體と用との不二であるところの事と理との不二不二三で、すなはち、梵音で、海潮音で妙音觀世音で、一音響である。

古人が「ナホビ」といふ神言靈に、直靈の支那文字を充當したのには、靈の直く正しくして、妙用を現はすといふ意味なので、靈の字を解けば、すぐに知ることができるのである。

靈は、零と讀む。

零とは空零で、○で佛教にいふところの五蘊皆空の義で、六道で六趣で、五に封するの六で、中心無きもので、宇宙を築かざるものであるから、箇體でない

のである。

空零の下に「𠀤」「𠀤」の二文字がある。

「𠀤」はまた、「𠀤」と「𠀤」との合成で、「𠀤」は机で臺で、象形の文で、高杯の形である。

「𠀤」は人で、兩人で、「𠀤」の下に恭敬奉侍の指事が「𠀤」である。「カムナギ」である。

その上の「𠀤」、「𠀤」、「𠀤」などと書いたのは、物の象形で指事で、多くの幣物を表示してをる。

「𠀤」が多数だとは数理なのである。

巫が多くの幣帛を捧げて零の下に、蹣躑と跪いて居る。

これが、靈の字義なので、五蘊は皆空、皆空であつて異靈奇怪である、との意を示して居る。

その奇靈の正誠正義の妙用妙相が「ナホビ」であるから、との意に依つて直靈と書いたもので、直靈とは妙音觀世音で、觀自在身であるところの觀世音菩薩なのである。

歌詞として、極大極小の事理を詠出した場合には、この妙音觀世音なのであるから、五種類に分けたうへでは、神界事理の

して、築き成したる宇宙は、布斗麻邇と稱する一圓相を標識基準として、不斷の活動を爲すので、事業としては、直毘大直毘神の稜威^{リョウイ}を仰ぎて、失墜することなく、國土としての高天原を築き成せよとの、神の代の神の御教^{ミノリ}と拜承しまつるのである。

「しほ」の内容として、此に擧げた古典の詞は、神の詞であるから、そのまま、神であつて、また、その神徳の妙用を教へられたのである。が、之が委しき説明は、「言靈祕説」を待つことにしよう。

第八、「生^{マクカミラモウミタマウ}神^{コトアマツカミ}」とは、別天神たる隱身の獨神が、八百萬の神を生み給ふので、「惠保婆^{エホバ}の神^{カミ}は、宇宙の外

に在りて、宇宙を造り給ふ」と云へるもので、「神の獨子たる基督を降し給ふ」と稱するもので、「伊邪那岐命伊

邪那美命二柱神は、別天神たる獨神の陰陽で、それが、國嶋をも、國嶋を統治す主宰者をも、生み給ふので、二

柱神の共に生みませる嶋は、十四嶋^{トラアマリヨシマ}で、神は、三十五神^{ミンアマリイツハシラ}で、天地と割割きたる時、國嶋^{クニシマ}としては、高天原た

る境地で、神としては、高天原統治の日神で、天照大御神と稱へまつりて、三十五神^{ミンアマリイツハシラ}にてましますので、その

二十五神とは、波留比比咩^{ハルヒヒメ}と稱へまつる^{フタツノヒカリ}で、我期大君^{ワガオホキミ}にてましますので、國家としては、天皇と稱へま

つり、人天萬類としては、直日^{ナホヒ}と謂しまつり、大虚空としては、二柱祖神^{フタハシラミオヤノカミ}と仰ぎまつるのである。此の二柱

祖神^{ミオヤノカミ}と稱へまつるは、生神^{ミコウミ}の妙用で、祓禊^{ミソギ}と白しまつるのである。

第九、「豫母都志許賣^{ヨモツシコノ}」は、如何にして生れたのか。日本紀には、泉津醜女と書き、極端に醜惡なる女と解釋

してある。「伊邪那美命の命せをよそにして、伊邪那岐命の投げ棄てられた黒御鬘の蒲子を撫ひ食ひ、筍を抜き

食ひなどした」とは記載して居るが、それだけでは、其の本質を明瞭にすることが出来ぬ。

「愛しき我が那邇妹としての伊邪那美命を、一火^{ヒトツヒ}にて見給へば、宇土多加禮斗呂呂岐^{ウジタカレトロロギ}て、何に例へやうもなく

之レを「天之御中主大御神・国常立神」と教へ、その之レを学得すべき道を「御身之祓」と呼ばれたので、「伊邪那岐・伊邪那美」の二柱、即、人天万類の祖神、即、物と云ふ物一切の種子たる ☺ 神の垂示ふるところである。人が人としての活動を念願するからには、必や、斯の道を明にせねばならぬ。

吾が「未来誌」の生誕は、唯是の一事を完成せんが為のみである。

以上 昭和廿八年（西曆一千九百五十三年）五月卅一日

祭祀答問録 (一)

昭和廿八年五月下旬、篋底より一綴の書を見出す。想ふに、昭和十一年の頃、古典研究会にて、問ひに答へたものの稿本であらう。当時集つたのは幾人でもなかったが、活発に質疑応答したので面白くもあつた。未来誌上でも、それを希望するのだが、それぞれ、他に忙しき人人なため、思ふやうでない。

今此の稿本を載せるのは、次ぎ次ぎと質問の多からんことを切望するが為でもある。

○直日と大直日

一、直日とは何ですか。

直日とは、「ヒカリ」と云ふことで、日神の神輪なのです。日神の神輪と白すのは、人間世界を照すところの主体であると共に、活用であつて、私共の日常見て最著しく思ふのは太陽であり、それに次ぐのは太月でありま

す。

それ故に、日本の古典は、天照大御神を日神、月読命を月神と白してあります。共に「ヒカリ」の著しき為
に、其の名を寄せたので、太陽が日神で天照大御神で、月が月神で月読命なのではありませぬ。正しく云ふな
らば、共に日神の神輪なのです。ですからそれが直日で、「ヒカリ」で、人間世界の灯明台で、人類社会の統率
者で、人民民族の統治者で、我等民衆の標識基準と仰ぎまつるところであります。

従つて、国家では 天皇 にましまし、家庭にては戸主であり、箇人にては根本魂で、各箇体では其の中心で
あるので、太陽系にては太陽を仰ぎまつるのであります。

二、直日ナホヒが光ヒカリだと云ふことは何の典拠に依るのですか。

それには、「タカマノハラ」の神伝と、旧事記の伝とが有るので、旧事記の巻頭に、「天アメ先成而ツチノチニサダマル地シカル後定。然
後於高天原化生一神号日天讓日天狭霧国禪日国狭霧尊」
とあります。それが火ヒカリだと云ふこ

とは、猶太の創世紀に、「神ニツノ光ヲ与ヘタマフ」とあるのと対照すれば、容易にうなづかるるので、天讓日
と国禪日との二日であるところの一神なのであります。天讓・国禪の「ユヅル」とは「ヨリイヅル」なので、

「天ヨリ出デタル日、国ヨリ出デタル日」と云ふことで、「天カラ出テ来タ日ト国カラ出テ来タ日トノ二日デア
ルトコロノ一神ガ天讓日天狭霧国禪日国狭霧尊」ト称ヘマツル神人デアル」との意味なのであります。

二日と云ひ二 光と云ふことは、支那文字の伝へを見れば、猶一層明瞭になります。玉篇に、日の字源を記
して、太陽の象形で ☉ だとあります。此の象形が太陽だと云ふことは、同じく太陰であつて、両儀であつて、

太極であつて、小極であつて、無極であると云ふ説明の省略文であることは、我等が肉眼にて見るところの太陽は、○にあらず、ましてや⑤にあらざることを勿論であるにもかかはらず、この一見不思議なる形状を太陽の象形なりと云ふさへあるに、更に日の字源なりと伝ふるものは、日が口の複数を示し、その内容が単純ならざること

を教へ、其の複雑なる姿とは⑤なることを指し、之レを楷書にしては、でで、デコボコで、出入で、陰陽で、雌雄で、日月昼夜明暗等で、賢愚利鈍で、現象で本体で、神魔で、這箇で、日本古典に、日神天照大御神とは姫神にましまして太陽神にてあらせられ、月神 月読命とは彦神にましまして太陰神にてあらせらるるなりと伝へ来れると、符節を合するが如くである。之れに依つて、二つの光が日ででで⑤で、天讓日国禪日で天狭霧国狭霧で、吹出したる狭霧の三女神で五男神で、その産出池たる天真井で氷で、天照大御神で建速素盞雄尊で、之レを天祖であるとして二柱と伝へたのである。

二柱の御相の一端は、右に記した如くであるが、其の御声は、^{ミコエ}「アメノミオヤアメユヅルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト」とも「アメツチノカミ」とも「カミ」とも「イザナギイザナミフタハシラミオヤノミコト」とも「タカミムスビカムミムスビミオヤノカミ」とも白しまつるので、之レを「日止」で、世の光であるからとて、日神の神輪で、それは、御声であり、御相であり、肉眼に見得る神としての相は光であるから、「日神即神輪」だと、人の目にては認むるよりほかはないのである。

光は二であつて一である。一であつて二である神。「カミ」と云ふ語が二の光と云ふことを最简单に教へてある。即、「天成地定」たる暁を指すのであります。それが、「然後於高天原化生一神」と記されてあるわけで、天地の神で、天地の神輪で、「天成地定」たる天地が「カミ」なので、「カミ」の「カ」は「天」で「ミ」は地

で、天津神^{アマツカミ}天津神^{クニツカミ}が即「カミ」なのである。さうして、その「カミ」と云ふのは主体より名づけたので、境涯から云へば「タカマノハラ」で、其の相^{スガタ}を「カミワ」だと神は教へ給ふので、之^レを「タカマノハラ」の神伝^{カミノツタヘ}だと云ふ。箇体たる宇宙のうへから「ナホヒ」と呼び、箇体を認めない大宇大宙のうへでは「オホナホヒ」と称へまつるのであります。

それ故に、日神^{ヒノカミ}の大直日^{オホナホヒ}で、日神^{ヒノカミ}の生みましたる神人^{カミノヒト}は直日^{ナホヒ}なので、人としての根本魂は直日^{ナホヒ}で、人と生れざる日は大直日^{オホナホヒ}なのであるとの意で、日神^{ヒノカミ}を太陽、神人^{カミノヒト}を天皇と称へまつるは、人類世界に於てはさうであると解脱^{サトリ}易からしめたまでのことである。と共に、如斯に人の世を人の世のままに神の代となせよとの神勅^{ミコトノリ}であると拝承しまつるのであります。

人皆は人の身ながら神の子と人の成すべく神治^{カミシ}らすなる。

天地の神にぞ祈る我が心大空の如広くあるべく。

①直靈^{ナホビ}と大直靈^{オホナホビ}

一、直靈^{オホビ}とは何ですか。

直日^{ナホヒ}が「ヒカリ」であるのに対して、直靈^{ナホビ}は「ヒ」であると云ふことができます。

其の「ヒ」とは燃ゆる火^ヒで光る日^ヒで、また然らざるの否^ヒで氷^ヒで、然らざるにもあらざるの非^ヒで、究極で無極であるところの靈^ヒで、大極で小極であるところの魂^ヒで、分割し得ざるの一^ヒで、分割し尽したるの一切^ヒで、箇体を築

きながら箇体を解脱したので、不二で不三で不四で、また然らざるので、相^{スガタ}でもなく声でもなく香味触等でもなくして、また然うでもないの、人の身としては、睡眠が之^レを想像する資料になるだけであります。目^メが有つても見ず、耳^{ミミ}が有つても聴かず、鼻舌身意等が有つても香味触法等を弁別せず、見聞覚知せずとも知らぬのが睡眠であるから、之^レに依つて臆^{オホロケ}ながらも推測し得るのであります。

燃ゆる火も取りてつつみて福路^{フクロ}には入ると言はずや智^{サト}くともなきに、北山にたなびく雲の青雲の星はさかれり月もさかりて。

此の古歌は、日神事^{ヒノカミワザ}の結果として、直霊^{ナホビ}の团成された状態を詠嘆したので、前半は、賢愚利鈍に関はず燃ゆる火を資料として箇体を築き箇体を養ひ育ててゆくものであるとの意で、後半は、星夜明月も倏忽俄然密雲雷雨とも変じ、生死起滅栄枯盛衰転変開落の時ならざるが現実世界の状態であるとの意である。

それが日神事^{ヒノカミワザ}の結果だと云ふことは、猶太の詩編と対読すれば容易に知らるるのである。

イスラエルの民埃及を出で、ヤコブの家あだしごとを離れし時、ユダは主の聖所^{イハ}となり、イスラエルは主の所領^{モク}となれり。海は之れを見て逃げ、ヨルダン^{ウシロ}は後方に退けり。山は牡羊の如く躍り、丘は小羊の如く躍れり。

此の詩は、正誠正義であれば、正位正業を得て、山河大地も一円光明体なることを実証し得らるるのであるとの意を詠んだので、正誠正義が「火^ヒ」で「日^ヒ」で「光^{ヒカリ}」であることを教へて居る。正誠正義にして神国を築くを、日神事^{ヒノカミワザ}と称へまつりて、「御身之禊^{オホミマノハラヘ}」即「ミソギ」である。

筒之男命・上津綿津見神・上筒之男命。天照大御神・月讀命・建速須佐之男命。十四柱神は、生れさせ給ふ。その生れさせ給ふとは、伊邪那岐大御神の「御身之禊」オホミマノハラヘであつて、神國樂園の築き成された曉である。その十四柱神と稱へまつるは、そのまま、伊邪那岐大御神と稱へまつる三柱の貴子にてましますなれば、天津日子日子番能邇邇藝尊と仰ぎまつる天皇にてあらせらるるのである。

アナカシコ
畏矣。

「仰ぎて見れば、天津日は、二つはあらず。人の世の、大天皇は、一柱」とは、スメラミコト三紫日向之橘小門之阿波岐原の禊の約言だと云ふことが出来よう。

天津日は二つはあらず。根本中心たる直日は、唯一不二である。唯一であるから、重重無盡又無量である。此のままに、無量無限であるから、各自各自が各自各自に、其の所有せる根本直日を明め得ない。全人類統率の大天皇を拜みまつることを知らない。まことに憐むべく悲しむべきの極みである。覺めよ。醒めよ。覺醒め來つて、此の火を揚げ。此の日を讃へよ。其處は大平等海にして、一碧瑠璃の光明世界で、平和嘉悦の高天原で、豊葦原の水穗國で、全人類世界此のままの樂園で、天國で、極樂淨土とも呼ぶのである。

第十一の、「天之眞名井」とは、宇氣比と云ふに等しい。

宇氣比とは、「汗氣伏せて、踏み登杼呂許志」たるもので、「汝が心の清明きこと」を知るもので、「天安河を中に置きて、十拳劔を、三段に打折る」ものである。

さうして、「物實を、モノザネ天安河の禊で、アマノマナキ天安河の禊で、天照大御神の祕事としての、御子生みなる「氣吹の狹霧」である。其の氣吹の狹霧とは、◎と畫きて、水火既濟と支那人の稱する「ミヅホ」で、ミヅホ

晝くのは、陰陽和合で、地天泰平なので、和魂^{ニギミタマ}たる大平等海裡に、直昆^{ナホビ}としての火を孕めるもので、古言に、「フフム」と傳へたところ、「フフム」とは、祓禊の義であると共に、その結果でもある。祓言としての「フ」と、「フ」とを重ねて、それを結ぶに、「ム」の音を以つてして一語を成したので、生産の義で、産靈で、産魂で、産靈産魂である。その産靈産魂結び止めたる玉緒を、「ミヅホ」と呼ぶ。

玉の緒を、結び結びて、人の身は、伊着くなるなる、天安河。

「タマノヲ」とは、「五伴緒」で、「八十神」で、「八上比賣」で、神としては、「八神」で、人としては、「八千魂」で、「八十萬魂」で、物としては、分分個個で、天上にては、群星で、地下にては、妖類魔族で、分散しては、邪惡醜陋で、死と呼ばれ、統一しては、善美正誠で、生と云はるるのである。

ところが、人は生を喜び、死を惡む癖が有るので、「タマノヲ」をも、「命^{イノチ}」と呼びて、生けるものとか、生くべきものとかの義に用ゐ來つた。けれども、「タマノヲ」も、「イノチ」も、本來は生死を通じて、千變萬化する靈魂^{クシビ}なりとの義で、「ヒ」を活用の方面から觀て名づけたのである。それで、それがまた直に、燃ゆるものであり、流るるものであり、上るものであり、下るものであり、暖きものであり、冷きものであり、尊きものであり、卑きものであり、天で、地で、陰で、陽で、死で、生で、水火である。それで、「ミヅホ」と呼ぶのである。

「ミヅホ」の「ミヅ」は、水^{ミヅ}で、滋潤^{ミヅ}で、稜威^{ミヅ}で、瑞祥^{ミヅ}であつて、經^{タテ}と緯^{タテ}とで、十^トである。その「ホ」とは、火^ホで、穗^ホで、秀^ホで、高く明に顯れたるものである。此の二語を合せたる「ミヅホ」とは、奇靈異變の實體であり、妙用であるとの義で、それをまた、稱詞として「水穗國^{ミヅホノクニ}」と用ゐては、萬物備はりて、瑞祥到り、稜威赫灼として、百姓潤澤なるもので、太平嘉悅の神國樂園なりとの義である。

此の神國樂園を築くべく、物實^{モノサネ}たる資料としての一切合切を、天之眞名井に振滌ぐと云ふのは、資料を整理するもので、神としての上では、「八十伴緒を統ぶるもので、五伴緒を率ゐるもので、八十神を打平ぐるもので、八上比賣を得給ふもので、大直日神が、八神の亦の御名にてまします」ので、人としてならば、八千魂を統一するものである。八千魂の統一したる暁には、人の心身^{ココロミ}ながらの神なので、之を説明的に云へば十で、一二三四五六七八九十であるが、其の實相は、一なる零である。

此の零が、天之眞名井なので、白玉光底に潺湲たるの泉である。古來、之を「本打切り末打斷ちたる天津金木」と傳へたのは、太邇邇の祕言で、極を教へたので、「與天壤無窮者」で、經としての時間を超えて居るから、緯としての空間を忘れて實在するもので、之が、人間世界に傳承したる「カミ」である。

ところが、人間身は、雜糅混淆なために、此の極を窮め得ないで、小我の見地に居て、神界を憶測するから、まるで、トンチンカンな悲劇が演出される。

^{ウケフネ}汗氣船を踏みとどろこし、天宇受賣、かみかかりすも。うつむろにして。

「ウツムロ」と古典に傳へたのは、神吾田鹿葦津比賣の宇氣比で、戸無き室と記して、零界虚空の義なることを教へてある。「虚空中にして御子の生れます」とあるものも、また固より此の零位なので、三産^{ミムスビノカミクラ}靈神座である。三産靈神座は、零で、極で、一であるから、天之眞名井と稱へて、神代の神の神座である。此ここに生れさせ給ふは、別天神で、隱身にてまします。

ところが、「天照大御神は、建速須佐之男命の物實を執らして、此の天之眞名井に振滌ぎ給ふのであるから、物實を純一不可分の零に擢きて、更に吹き生し給ふの義で、其の吹き成し給ふは、^{ヌナトモユラ}「奴那登母母由良に振滌ぎて、

神國秘本成の秘事

佐賀美爾迦美」給ふのである。

「ヌナトモモユラ」とは、「内は富良富良、外は須夫須夫」と云へるもので、「妻須世理毘賣」の教で、箇體成立の神業である。「サガミニカミ」は、噬み咬むので、作り成すものである。之を換言すれば、「ヌナトモモユラ、サガミニカミ」とは、修理固成の義で、天沼矛の神儀尊容で、「二柱神が、淤能碁呂嶋に天降りまして、天之御柱を見立て、八尋殿を見立て、其の妹に、汝が身は如何に成れると問ひ給へば、吾が身は、成り成りて成り合はざるところ一處在りとまをしたまひ、伊邪那岐命の御身は、成り成りて成り餘れる處一處在りと詔りたまひ、成り餘れる處を以て、成り合はざる處に刺し塞ぎて、國土を生み成さん」と、相互に契りて、身と言と意との統一するにあらざれば、神界を築き得ざるものなることを垂示したまへるもので、「成り合はざる處」とは、女で、凹で、陰で、^フと描くので、數としての二であると共に五で、それは緯である。「成り餘れる處」とは、男で、陽で、^ヒと描くので、數としての一であると共に六で、之は經である。

緯なる女とは、滋潤であり、水であつて、罔象女と傳へたる水神である。之を二だとは、成り合はざるが故であり、また之を五だとは、成り成りて子女を産出するの母胎であるからなのである。經なる男とは、稜威で、火で、「迦具土神」で、地界の主神である。そこで、之は、男としての^ヒで、母たる二に對しては六である。六と云ふのは「ム」で、結びたるもので、五なる成數より産出せられたる一で、之を六なる一と説明するのである。之が、天地否塞の祕數である上からは、また、零なのである。

それは兎に角として、此の經と、其の緯との相交りたるものが、國土であり、人であり、天神で、地祇で、天地で、泰否で、神魔である。

る。之れを、

人の世では「聖」と呼ぶ。則、「カミ」である、我の内に拝む神であると共に、内外不二に拝みまつる

「天皇」にてまします。

カミノイノチハハテモナシ
聖 寿 無 窮。

之れは単なる讃へ辞でも祝ひ詞でも希望の詞と云ふのみでもない。まことに宇宙の事実で真理なのである。

太古以来、その聖なる人類は此の事実を明らめ得て、此の真理の上に国を建てたので、それは「神聖国祚」であつた。

その国は穢れ無ければとて「土」と書き「穢土」と區別したのは注意深き支那文字の成立である。形に書けば○である。或は□とも描く。之れを日本語ではアマと呼ぶ。空なのである。「天」であり、「海」であり、「女」である。

「ア」は発ぎ発いて、果て無く限りの無いのであり、「マ」は円満具足であるから、「アマ」とは大宇宙の義で、都べてのものの産出者で、祖である。則、母胎で空界で零境である。之れを「イヘ」と呼ぶ。

此の○には不断起滅の火が有る。その火の燃ゆるを見て、○の中に一点を点ず。則、○である。「いへのあるじ」で「光」である。「不断起滅の火」であるから即「一点不滅の火」である。

一点不滅の火は、則、無尽無量の水で、それがそのまま無際無涯の身であり、身も無く境地も無い心である。

それは身でもなく水でもなく火でもなく心でもないところの○であるからとて、古老は、

ヒツミヨイムナヤコト
一二三四五六七八九十と称へて、円満具足の箇躰だと讃美したのである。

「伊邪那岐命は、天照大御神に、御頸珠を賜ひて、汝が命は、高天原を知らせと詔せられた」とあるが、その高天原とは、清み澄みて明み切りたるなれば、「眞澄鏡」で、それは、中心と外廓との完全に統一したる象であるから、「日像鏡」で、和魂の宿るところであるから、「眞經津鏡」で、生み生みて限り無き御祖にてましますから、「増日鏡」で、「増靈鏡」で、發き發きて涯無き奇靈であるから、「増鏡」で、「天地初發」で、「その高天原に成ります神、天之御中主神」の知ろしめすところであるから、その神は、またただちに、天照大御神にてましますとおのづから明である。

その高天原は、唯一であつて、重重無盡又無量であるからとて、「ヒトツ」と呼ぶ。さうして、**ヒトツ**とも、**ヒツ**と書いたのは、此の故で、「鹽田表品固表品に書き成したまへる^{オノゴロ}湊能基品嶋」である。

「湊能基品嶋に天降り坐す」は、二柱御祖神で、それは即、天御柱で、中心の一點である。その一點の裏は、^{クニノミハシラ}國御柱である。二つであつて一つなので、その一である「大虚空」を拜みまつれば、その中心には、その全を主宰統率し給ふ天之御中主神、即、天照大御神の坐しますのだとの意で、唯見る大虚空も、その大虚空の大空たり得るは、天之御中主神の坐しますが故で、八百萬神の蕃息し給ふは、二柱御祖神の坐しますが故で、そ^{ミタマ}晃耀赫灼たるは、天照大御神の治ろしめし給ふが故である。

古典には、「天地初發之時。於高天原成神名。天之御中主神」とあり、また、

伊邪那岐命大歡喜詔。吾者生生子而。於生終得三貴子。即其御頸珠之玉緒母由良邇。取由良邇志而。賜天照大神而詔之。汝命者。所知高天原矣。事依而賜也。故其御頸珠名謂御倉板舉之神」と載せてある。

此の二つを、人間約持の觀念で見ると、時代が別なので、天之御中主神の高天原は、天地初發の時、

火神

作用の「火」

多田山公台遺稿

死者を齋ると云ふことは、分

裂し分散し行く身魂をして、速

に其の極に達せしむるの義であ

るから、之れを「ヒノカミワザ

ミワザ」とも「ヒノカミワザ」

とも「ヒノカミワザ」とも、

「スリカタメナスナルアマノ

ホコノカミワザ」とも「ヒ」

とも称するので、物で云へば燃

ゆる火で、光る目で、極端なる

氷で、究極の靈（ひ）で、根本

の魂（ひ）で、解脱の零（ひ）

で、最大最小の二で、統治統率

の●◇田十　十であるから、極

大で、極小で、窮数で、満数で

「ヒ」だと教へられたので、其

の色を云へば緋で、その相を云

へば一圓相（ひかり）で、其の

響を云へば一音響で、人の聴き

得ざるおとたなばた人知らぬ遮

通で、本打切り末打斷ちたる天

津金木で、始終の無き始終で、

非で、否で、非否で、靈（ひ）

で、魂（ひ）で、産靈（むすひ）

で、産魂（むすび）で、高皇産

靈で、神皇産靈で、生魂で、足

魂で、玉留魂で、高魂で、神魂

で、生玉で、足玉で、玉留玉で

道反玉で、死反玉である。

「イナボ」と云ふのである。

日本書紀一書曰。

マタミコトノリシタマハク　タカマノハラニシラス

「又勅曰。以言高天原所御齋

庭之穂。亦當御於吾兒。」

ミコトニ　シラサシメヨ

「齋庭之穂」とは「マツリノ

二ハ」の「イナボ」であるから

極大極小の零（ひ）を結び結び

て宇宙を築き、宇宙を統治すべ

きなりとの義である。

齋庭（ゆには）とは「ミタマ

マツリ」で「齋」である。

之れを「メノカミワザ」とも

「ヒメカミワザ」とも称するの

で、「イナシコメシコメキ」で

醜女で、醜の又醜の醜の極であ

る大醜で、大美女なのである。

「亦當御於吾兒」とは、大直

日の如く、直日の徳を明にすべ

しとの義である。

齋庭祕言一圓相。

皇子皇孫一音響。

眼耳鼻舌一空零。

隨縁起滅一天命。

ひふみよいむなやここのたり

やももちちみてり。

あちめ　あうを。

う。う。う。う。う。と。う

と。う。

◇

「稲羽素菟」とは、「イナバ」

なる正しき資料にして、「シロ

ウサギ」とは「ウサギ」にして

極小の結びたる身なりとの義な

るなり。

極小の結びたる身なりとは、

「ウト」にして神聖なり。

之れを「カミナガラ」とたた

へて「カム」なり。

「カミノマニ」にして神人な

り。

以上

昭和十一年七月十四日夜半

無宇宙

(^{ヒカミ}ヒ) 日神 (極, 極大極小. う)

(^{ヒカリ}ヒカリ) 直日 (日神の神輿) = 神

(最大最小)

(極小の結ひたる身ウナト)

宇宙

^{ヒカ}直日の(そのまゝの)人 = ^{カミ}神人 (名詞)

→ これは「神律に正しく^{ヒカ}随った人」とも

表現できるので、修飾語としては、

その「神律に随ってこれを^{ヒカ}する様」を

指して ^{カミ}神へ、と言う。(未23頁)

(神聖、神人、カミ、はほぼ同義語)

「ヒ」の意味とその表現について

零^ヒ——時空や万物を構成する根本資料としての「實在」そのものを指す名称。

日^ヒ——その「實在」が「中心」として機能している際の名称。「統一^ヒ体」全体を指す場合もある。

↓極、唯一点、種子^{タネ}、、光^{ヒカリ}、日神^{ヒノカミ}とも。

火^ヒ——その「實在」が単なる「資料」としてしか機能していない状態の名称。

「中心」に付随してその「外郭」を構成するか、さもなくば遊離して「魔^{マガツビ}」となる。

イナボー「種子」と同義。極大極小の零（ヒ）のことを種子^フとも言い、「齋庭之穂」（マツリノニハのイナボ）とも表現する。

イナバー正しき資料のこと。

万物は「中心」より出でて「中心」に帰る。その「中心」を「ヒ」と呼ぶが、同時に、その出たり帰つりする際の「一貫した筋道」をも「ヒ」と称する。

人間にこの「ヒ」を教えるが、振魂尊こと天照大御神の御神徳である。

ツルタマノミコト

アマテラスオホミカミ

ミハタラキ

一 記伝に「本膚とは、見吹拆たるが差合のみならず、皮も毛も本の如くに成を云なり。」とあるのは誤りであつて、風に吹き離かれた皮膚が癒えるのである。即ち以前の皮膚のように、きつと癒えるであらうの意。書紀の一書に「大己貴命与少彦名命、戮力一心、經當天下。復為顯見蒼生及畜産、則定其療病之方。」とある。

二 記伝に「此菟の白なりしことは、上文に言ずして、此処にしも俄に素菟と云るは、いささか心得ぬ書ざまなり。故思に、素はもしくは裸の義には非じか。若然もあらば、志呂とは訓まじく、異訓ありなむ。人猶考へてよ。」とある。三 者の字は助字で意味はない。「昔者」「頃者」などの「者」と同じ。

三 袋をかついで賤しい風をしてゐるけれども、

四 「鹿袋」第十に「兎とワニ」の話を載せてゐる。その前半は「因幡記ヲミレバ、カノ国ニ高草ノコヲリアリ。ソノ名ニ二ノ釈アリ。一ニハ竹草ノ郡ナリ。コノ所ニモト竹林アリケリ。其ノ故ヘニカク云ヘリ。其ノ竹ノ事ヲアカスニ、昔コノ竹ノ中ニ老タル兎スミケリ。アルトキニハカニ洪水イデキテ、ソノ竹ハラ水ニナリヌ。浪アラヒテ竹ノ根ヲホリケレバ、皆ナクツレソソジケルニ、ウサギ竹ノ根ニノリテナガレケル程ニ、オキノシマニツキヌ。水カサヲチテ後チ、本所ニカヘラント思ヘドモ、ワタルベキチカラナシ。其ノ時キ水ノ中ニワニト云フ魚アリケリ。コノ兎、ワニニイフヤウ、」となつており、以下は大体古事記と同様である。

五 前文との接続が少し唐突であるが、八十神や大穴牟遲神の求婚のことを省略したのであらう。

2 八十神の迫害

へてむ。故、汝は其の族の在りの隨に、悉に率て來て、此の島より氣多の前まで、皆列み伏し度れ。爾に吾其の上を蹈みて、走りつつ讀み度らむ。是に吾が族と孰れか多きを知らむ。』といひき。如此言ひしかば、欺かえて列み伏せりし時、吾其の上を蹈みて、讀み度り來て、今地に下りむとせし時、吾云ひしく、『汝は我に欺かえつ。』と言ひ竟はる即ち、最端に伏せりし和邇、我を捕へて悉に我が衣服を剥ぎぎ。此れに因りて泣き患ひしかば、先に行きし八十神の命以ちて、『海鹽を浴み、風に當りて伏せれ。』と誨へ告りき。故、教の如く爲しかば、我が身悉に傷はえつ。』とまをしき。是に大穴牟遲神、其の菟に教へ告りたまひしく、『今急かに此の水門に往き、水を以ちて汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲黃を取りて、敷き散らして、其の上に輾轉べば、汝が身本の膚の如、必ず差えむ。』とのりたまひき。故、教の如く爲しに、其の身本の如くになりき。此れ稻羽の素菟なり。今者に菟神と謂ふ。故、其の菟、大穴牟遲神に白ししく、『此の八十神は、必ず八上比賣を得じ。尙を負へども、汝命獲たまはむ。』とまをしき。

是に八上比賣、八十神に答へて言ひしく、『吾は汝等の言は聞かじ。大穴牟遲神に嫁はむ。』といひき。故爾に八十神怒りて、大穴牟遲神を殺さむと共に議

古事記93頁 と 秘稿「大神」

「中心」の象徴 (カミ)



大國主神

「外郭」の象徴 (マガツビ)



八十神 (彦兒)

イナバのシロウサギとは、「極小(正しい資料)の結びたる身」^{のこと。}

これが傷ついた時の対処法が、互いに全く異なることを

描写することで、大國主神と八十神の違いを表現した神話。

「マガツビのやり方では傷がひどくなる。

「カミのやり方で初めて傷が治る。

これによって、大國主神は「修理国成」を正しく行なうことの

でまゐる存在(カミ)であることと、みづから証明してみせたので、

ウサギから「あなたが八十比売と結びたてた」う」と

祝福を受けた。

極小(ウ)

正しい



このプロセスが「カミナガラ」である。

への結びたる身(ウト)

ヒ
零 (正しい資料)

↓
この正しいプロセスが「カミナガラ」である。

ウサギ (正しい資料が正しく結ばれた結果としての 実体)

中心 (カミ) は「カミナガラ」に何かを成すことができるが、

外郭 (マガツビ) には、それができない。

八十神は「ウサギとさらに傷つけた」ことによって、

みずからがマガツビであることを証明し

大國主神は「ウサギの傷を正しく治した」ことによって

みずからがカミであることを証明した。

「極」と「火」の表現の意味

垢穢を掃ひ浄土を築き苦悩を去り樂土を成すためには、「零境」に徹することである、とする。

「零」とは「無」であり、「無」が極まると「有と化する次元」のことであり、之を別の詞では「極」という。

極とは、「一切を脱却するもので、脱却したるもの」の意味である。

これを人間身として理解できるものでは「火」で表わす。

日本天皇の神伝である「大祓」の秘儀として、「火」を掲げることにより、一切衆生を靖寧和平ならしむるとされるのは、この意味である。

「極」とは、別の詞で表わせば、「無の有」、「極大極小の火」、「無と有の一致点」などと表現される。

また、死者を「斎る」ということは、「分裂分散していく身魂」を速やかにその「極」に達せしむるという意味がある。

また「火」は「ヒ」と称し、他の文字で表わすこともある。

鎮魂帰神とは みたままろ 身魂 かみかたり 祓刷と神挂のこともさう。

身魂齋とは、遊離の諸魂を招致奉齋して
高天原を築き日と火と日若宮との宇宙
を産出し長養して神國たる人類世界と
成さんとし成すなる禍津日・八十禍津
日・大禍津日・直靈・大直靈の神事で
あり、神挂とは現身を調伏し濟度し救
出して白玉身と成して自ら其の白玉身
裡に白玉棲閣を築き、之れを磐境たる
胎磐として鏡とし鏡の船として極大極
小の比を招祭りて直日・大直日の人と
成りて生誕するの祓禊で、天照大御
神たる天御鏡尊誕生の神儀尊容で
ある

日本民族の信仰(一)

多田雄三

舊事紀に既に恩頼の支那文

字を布由なる日本語に當て用ゐて居る。布由とは天譴日國禪日の天狹霧國のさきり狭霧としての築城との義であるから、天界現成地界浄化の曉に天御鏡の出

生し給ふとの神言靈で幸幸である。恩頼とは固より何の關はるところも無いのである。それにも關はらず斯かる翻譯を為したのは、支那民族が巫覡の思想に惑はされ靈意を問ひ異靈を求むる欲望心に駆られて墮落した為の謬見誤想である。

天御鏡尊誕生
鏡の船

幸幸とは天狹霧國狹霧で天浮橋の美觀妙趣で天沼矛の神事であるから、幸福の意味は有るが恩頼の意は少しも無い。亦紀記等に鎮魂婦神の文字を用ゐて加美加利の義を誤り傳へ、後人は又更に訛りて加美賀加利と呼んで全音義を破壊して居る。鎮魂婦神とは身魂齋で、遊離の諸魂を招致奉齋して高天原を築き日と火と日若宮との宇宙を産出し長養して神國たる人類世界と成さんとし成すなる禍津日・八十禍津日・大禍津日・直靈・大直靈の神事であり、神挂とは現身を調伏し濟度し救出して白玉身と成して自ら其の白玉身裡に白玉棲閣を築き、之を磐境たる胎磐として鏡とし鏡の船として極大極小の比を招祭りて直日・大直日の人と成りて生誕するの祓禊で、天照大御神たる天御鏡尊誕生の神儀尊容であるから、釋迦傳に所云の佛誕で天上天下独自の尊體である地藏尊であるとの義である。で此の兩者には顯界の神事と幽界の神業との區別が存り、幽齋と顯祭との差異が存る。

幸に明治天皇の生れましに依りて日本民族は其の帰向を指示せられたのである。

しるべする人を嬉しく見いでけり
我が言の葉の道の行く手に。

御製歌を拝誦して民人は唯一筋に國土經營を翼賛し讚美し奉るべきである。

大君のまけのまにまに人は皆國こそ築け心廣野と。

惟神神の知るなる皇國は唯神ながら神知らず遮邇。

之れ日本民族が高天原より傳承し來れる日本國體觀にして、日本天皇觀にして天皇にたましますので、正しき日本民族の正しき信仰である。

日本民族は過今來を通じ生死を隔つることなく此の信仰でなければならぬ。然らざれば邪道魔境に墮落せるもので、六道輪廻の亡魂亡靈と呼べるべきもので、正しき人生を経綸することはできぬのである。

單日本民族と云はず、人類は皆悉く然るべく、萬類亦皆悉く然るべく、萬物亦復如此であつて初めて天地發け高

天原現成し魔軍降伏して浄土湧出し醜
穢洗はれて楽園築かるるので、之れを
神代と称へ神の人と呼び神の國と讚美
するのである。現世即天國で娑婆即浄
土で現身成佛で此の土即ち高天原で此
の身即ち神身である。修理固成たる白
玉身で白玉樓閣で白玉の眞玉勾玉で細
又千足國である。

白玉身とは、皇土であるから日本天
皇統治の楽園で天皇國との義である。

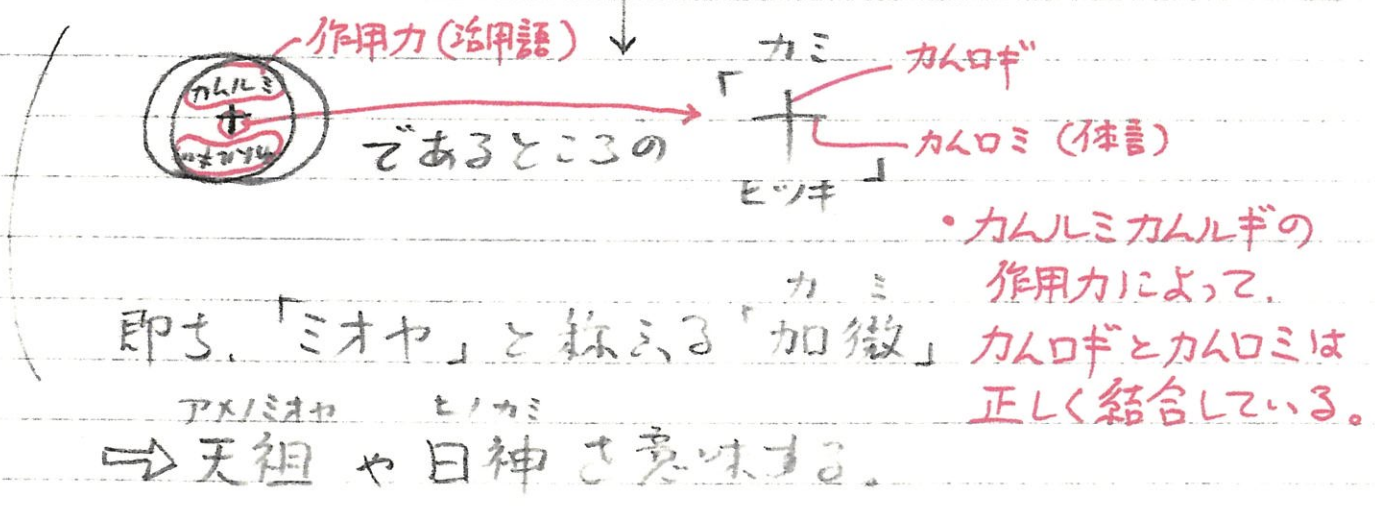
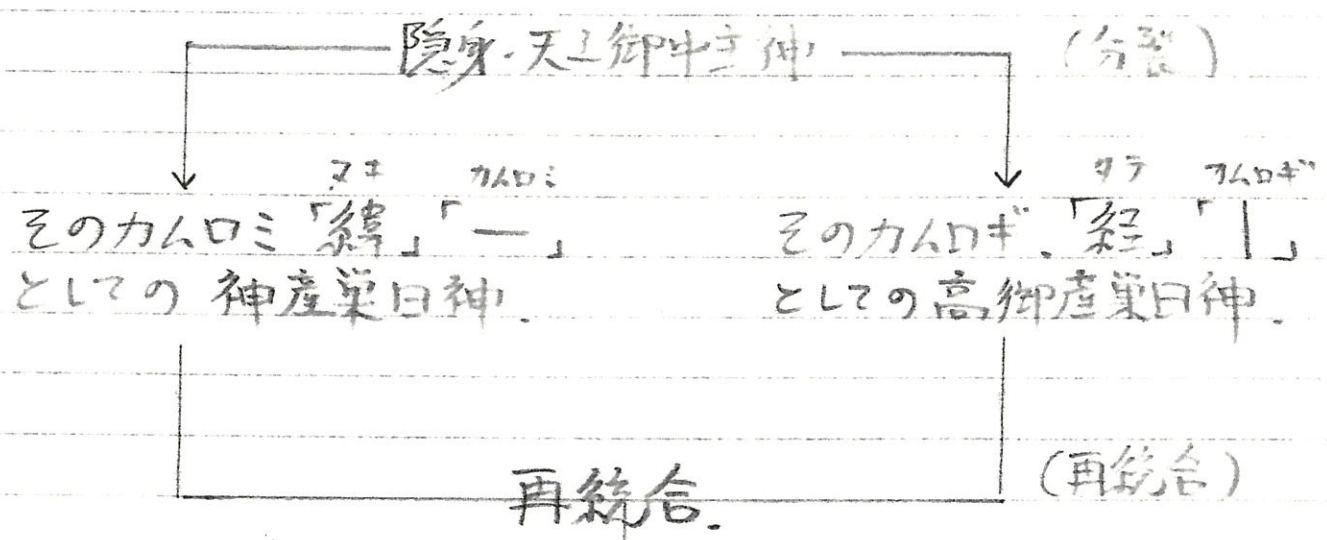
然り。天皇と称へまつるは天津神
籬・天津磐境を起樹てて高皇產靈尊の
加美加利給ふところであることは日
本書紀の傳へたるが如くである。故に
地界魔境である黄泉醜女を、伊邪那美
神の調伏し濟度し救出して築き成した
る高天原から伊邪那岐神の產靈に產靈
て產出したまひし神人にてましますの
で、天照坐皇大御神・天照皇大御神・
天照大御神の神徳を備へたまひし神
身であらせらるるから、極大極小で極
無極で大宇大宙で大宇宙の大中心で無
宇宙の宇宙で無中心の中心で一で一切
で、絶對ならざる絶對なると共に相對
ならざる相對であるところの絶相對
で、極限せらるるところ無くして極限
を示して居るから限でなく無限でもな
い。萬葉集中に莫覓圓と記載したのが
此の義である。

此の大宇宙の大中心としての莫覓圓
の國とたたへまつるは天皇にてましま
す故に莫覓圓隣と支那文字を假借して
其の義を示したのである。天皇即國體
にてましますと共に體用不一不二にし
て耶遮止とたたへまつることを古典に
依りて窺ひまつらるのである。
體用不一不二なる耶遮止とは直靈で神
直靈で靈で魂で布斗遮遮で布斗能利止

ミコトミコトイノチ
で尊で命で命であるから大死で解脱で
涅槃で觀世音で佛である。基督で十字
架で死生觀であるから天皇氏地皇氏で
黃帝で帝である。日本民族は比と傳へ
一神と教へ日火一氷靈魂非否と訓誡
へて居る。陰で陽で陰陽不測で神魔で
あるとは支那民族の教へ來ったところ
で印度人は六道輪廻地藏佛界と垂示し
て居り猶太民族はアララットと教へて
居る。

未来250頁の図、「ヒノカミとしては」の説明、

未来230. 『その「^{カミ}十」と結び結ぶ(元としての)隠身^{ヒノカミ}』

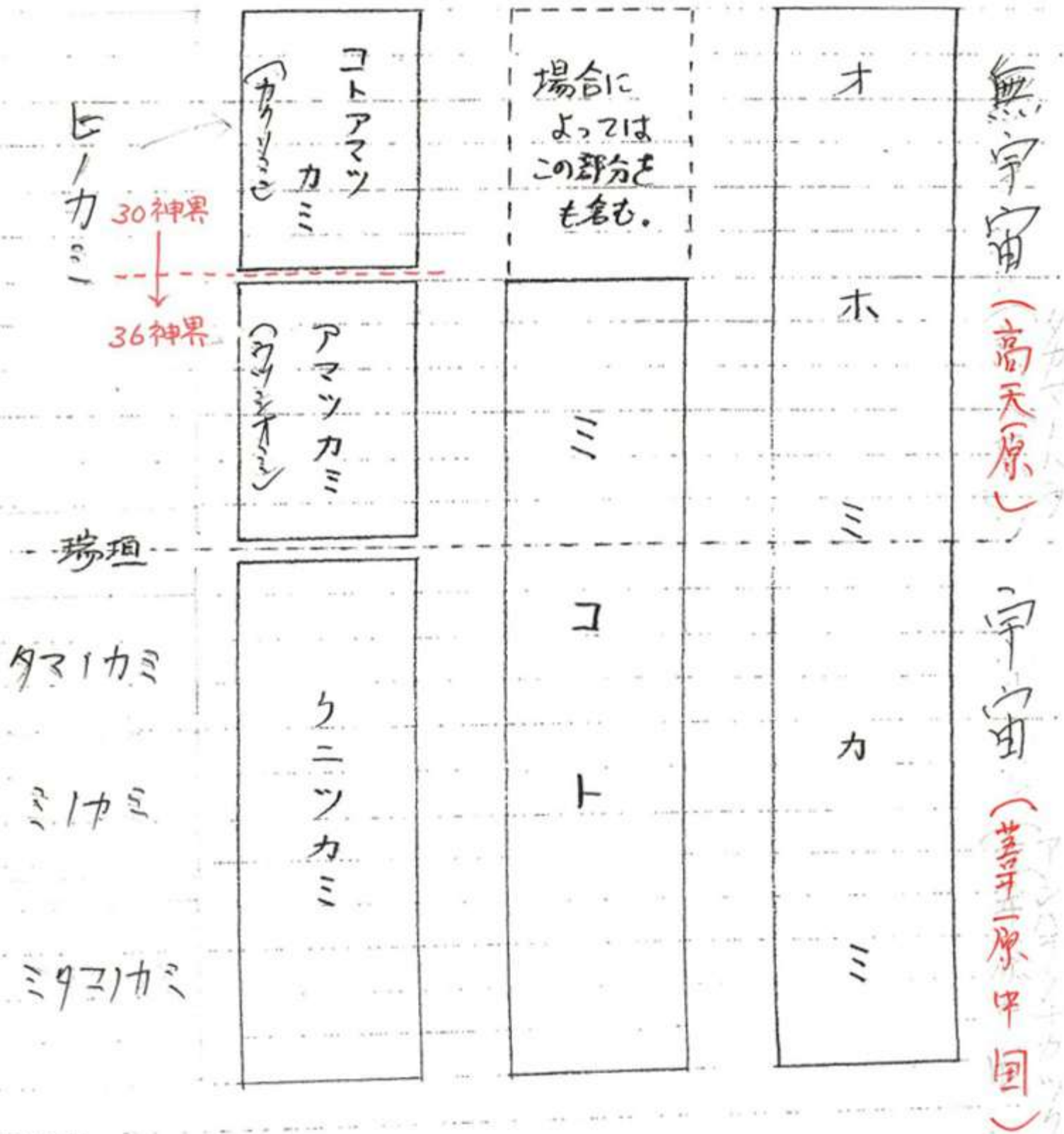


典型的には(ヒノカミとしての)天照大御神、

→ 基本的には、『こうした「二つのもの」への分裂と

その再統合』というプロセスを経て、ヒノカミ→タマノカミ→ミノカミと「組み直されて」ゆくのである。

概念図



1.

2.

無
常
宙

コトアマツカミ
(カケリミ)

アマノカミ
(ウツシオミ)

ミ
ノ
カミ

三
貴
子

瑞垣

宇
宙

ウツツカミ

ツツノカミ

ミノカミ

ミツノカミ

ミトノカミ



上半分は一つにまとめる
「天祖・天照大御神」

下半分は三つに分けて
「アマテラス・ツクヨミ・スサノヘ」

「アマンノミナカヌシ」と称へるものに等しい。

↓ 絶大無限にして、その圓滿自足の統一体たるものなりとの義

カミにてそのものの義

→ 大宇大宙

連落架枯

無限

→

生死遷流、出入往還

ミ ↓ 充滿実実
（大宇宙の
閉ぢりたる實なる
堅固の歸りたる
圓里の土なる面）

↓ 幽玄の意、
明南

三産魂 = 身と魂の
御魂
生魂、足魂、玉留魂

シ ↓ ミタマ

ホ ↓ 火明、
ホ、ア、カ

固く強く生生發展と止まるもの

オ ↓ 伸に展びて、

際限なく拡がる

オ、ホ

ミ ↓ 三、
オ、ホ ↓

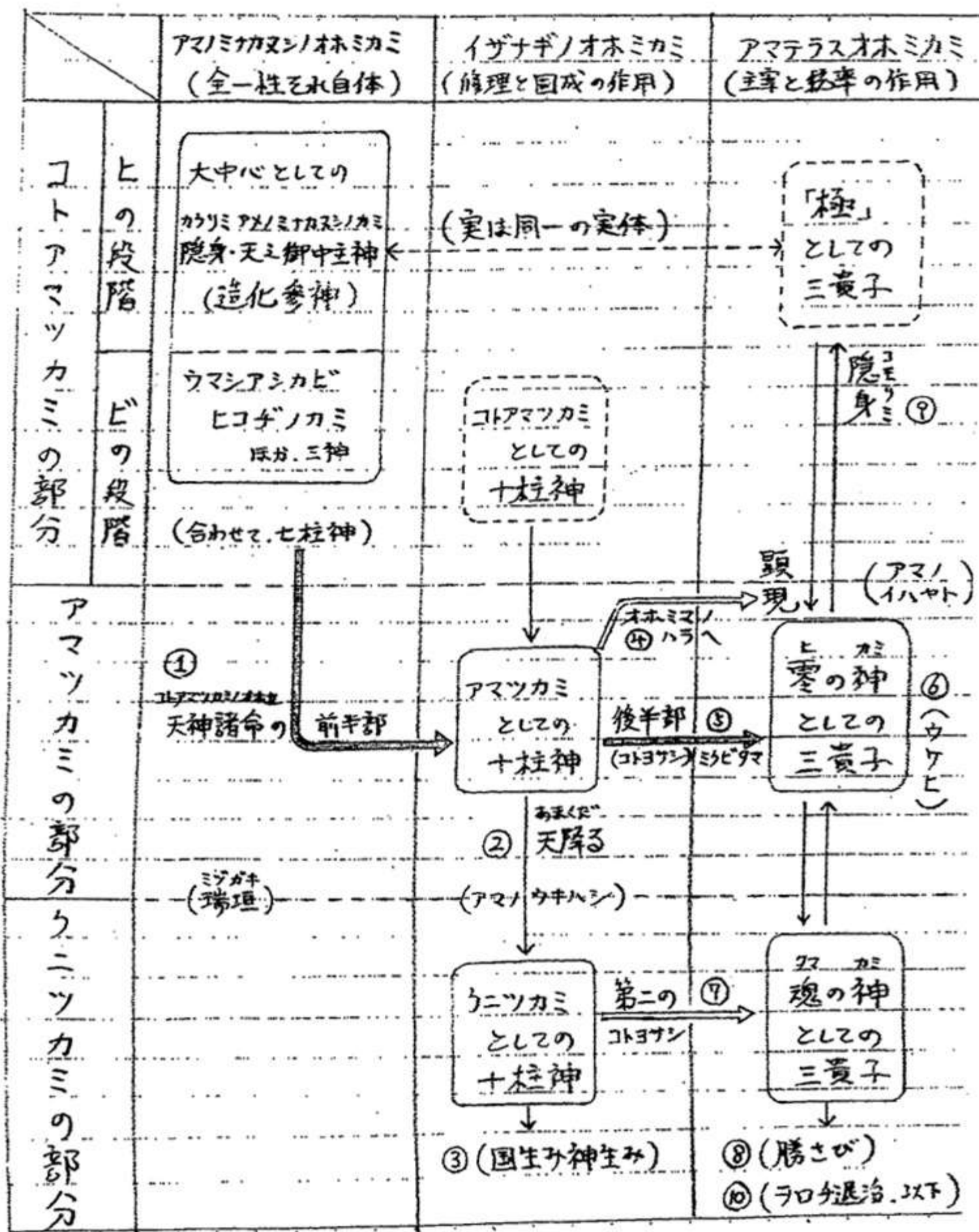
実と魂の
御魂

三産魂 = イ、ウ、エ、
生魂、足魂、玉留魂

↓ 伸びる性質を有する

オホミカミ コトアマツカミノオホセ
 図表：大御神と天神諸命

7



ミコト・・・・・・・・一円一音昭昭浪浪たる「火」

火	↑	火
の		の
い		燃
ス		え
び		て
て		は
は	↓	

顕幽表裏に常立つ。

(尽天尽地の火)

カミ・・・・・・・・顕幽表裏の整理を司る

(どちらか一方に所属する)

⇒修理固成を始める前の段階では、

イザナギ・イザナミは、明らかに無宇宙の側に坐す
アマツカミなので、～ノカミと呼ばれるが、

国生み、神生みの段階では、

イザナギ・イザナミは（本体を無宇宙側に残したまま）、
宇宙の側に降りて^来るので、『アマツカミであると同時に、
また、クミツカミである』という存在である。

故に～ノミコトと呼ばれる。

経緯無クシテ経緯ヲ現ズルハ現象世界ノ主體ニシテ
 現象世界ノ中心ニシテ現象世界ニシテ現象世界タル人
 間身心ノ知り得タル窮極ナリ。窮極ナルが故ニ
 シテ一切ニシテ最小ニシテ最大ニシテ箇體タル宇宙トシテ
 ノ在ル限リナリ。

在ル限リナレバ窮數ニシテ滿數ニシテ最小ノ數ニシテ最大
 ノ數ニシテ最大最小ノ數ニシテ経緯ヲ認識シタル限リ無
 キ世界ナリ。故ニ有限ノ無限ナリ。

有ク現限ノ無限ナル世界ヲ萬世一系ノ世界ト呼ブ
 象世界ヲ一貫シテ不變易ナリトノ義ナリ。

開華落葉榮枯盛衰生死遷流ニツク開華
 落葉榮枯盛衰生死遷流ニツク開華
 榮枯盛衰生死遷流ニツク開華
 榮枯盛衰生死遷流ニツク開華

無キノ國ナリ

之レヲ莫大國隣ニ

稱ヘテ大日本帝國ナル



高天原



神國ナリト云ナリ

秘稿『日本天皇国』のまとめ

「コトアマツカミの領域」と「アマツカミの領域」とを二つ合わせて「高天原^{タカマノハラ}」と云う。

両者はともに「無宇宙」だが、「コトアマツカミの領域」は、「宇宙」の存在を前提としていない本来の意味での「無宇宙そのもの」であり、一方、「アマツカミの領域」とは、「宇宙」の存在を前提とした上での、それに相対^{あいたい}する領域としての、より限定された意味での「無宇宙」である。

万葉集の用語としては、前者を「莫囂圓^{バクガウエン}」と、後者を「莫囂圓隣^{バクガウエンリン}」と称する。

神道の用語としては、前者は「火神宮^{ひのかみのかみみや}」であり、後者は「天津神宮^{あまつかみのかみみや}」である。

また、場所によっては、前者を「アマ」と呼び、後者を「アメ」と呼ぶことも可能だろう。

ともに高天原

コトアマツカミの領域	アマツカミの領域
バクガウエン ^{ひのかみ} ^{かみみや} 莫囂圓 火神の神宮 ^ヒ 国無きの日 カガミ (国を産出するの祖) 大宇宙の大中心 天照皇大御神 (^{ヒノカミ}火神) 極大極小 (アマ)	バクガウエンリン ^{あまつかみのみや} 莫囂圓隣 天津神宮 ヒの国 ミカガミ (カガミノフネ) 宇宙の中心 (人間身では根本魂直日^{ナホヒ}) 天照大御神 (^{ヒノカミ}日神) 最大最小 (アメ、天)
「日本民族発祥の神界」も 「日本天皇の祖神」も、実は、 アマツカミ (伊邪那岐命) ではなく コトアマツカミ (天照皇大御神) なのだ、という意味	アマツイハサカ アマツクニ アマツクニタマ 天津盤境 天国 天国魂 ムスビ カミ ミムスビ 産霊の神 皇産霊 有限の (中での) 無限なる世界 万世一系の世界→十二神界 (イザナギ) ヒノワカミヤ (ヤマト)

上、秘稿「日本天皇国」より抜粋

ミコト・・・・・・・・一円一音昭昭浪浪たる「火」

火のい
スビ
ては
↓
火の燃
え
ては
↑

顕幽表裏に常立つ。

(尽天尽地の火)

カミ・・・・・・・・顕幽表裏の整理を司る

(どちらか一方に所属する)

⇒修理固成を始める前の段階では、

イザナギ・イザナミは、明らかに無宇宙の側に坐す

アマツカミなので、～ノカミと呼ばれるが、

国生み、神生みの段階では、

イザナギ・イザナミは（本体を無宇宙側に残したまま）、
宇宙の側に降りてくるので、『アマツカミであると同時に、
また、クミツカミである』という存在である。

故に～ノミコトと呼ばれる。

1. 天之御中主神
2. 高御産巢日神
3. 神産巢日神
4. 宇摩志阿斯詞備
比古遲神

コトアマツカミの領域

莫^ワ畧^{リョク}圓^{エン}

5. 天之常立神
6. 国之常立神
7. 豊雲野神

8. 宇比遲邇神
9. 妹須比智邇神

十柱神
伊邪那岐大御神
イザナギノオホミカミ

10. 角杵神
11. 妹活杵神
12. 意富斗能地神
13. 妹意富斗乃辨神
14. 淤母陀琉神
15. 妹阿夜訶志古泥神

アマツカミの領域

(天)

莫^ワ畧^{リョク}圓^{エン}隣

無宇宙

16. 伊邪那岐神
17. 伊邪那美神

天神諸命
アマツカミノオホセ

アマツカミをクニツカミにする
コトアマツカミのオホセのこと

ミツガキ
瑞垣

古事記では

伊邪那岐命

伊邪那美命

となる

クニツカミの領域

宇宙
クニ
(国)

古典では

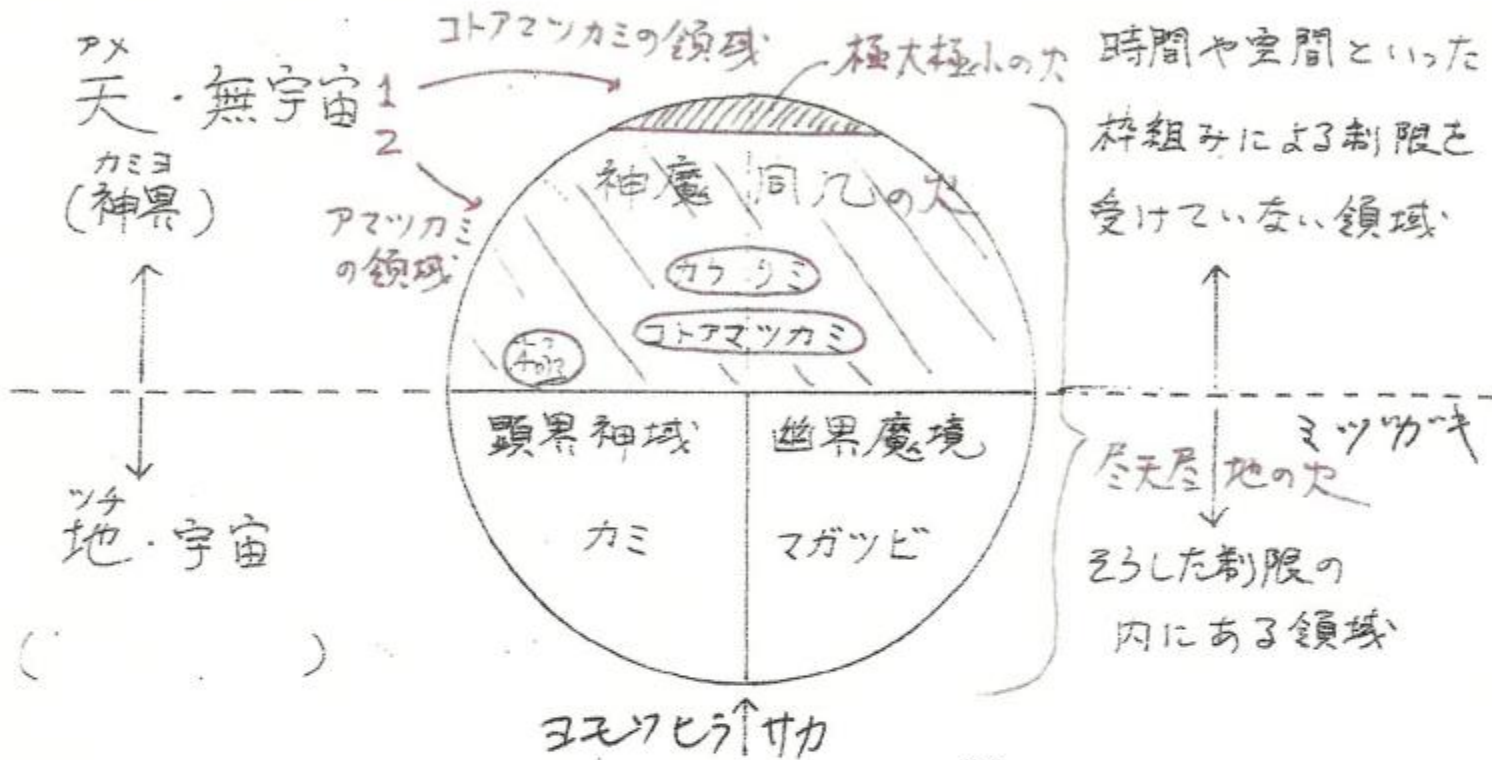
「伊邪那岐命伊邪那美命二柱神」と記されているが、

「イザナギイザナミフタハシラノカミ」と奉称されなければならない。

(多田流)

天地概略図

アメとツチを合わせて、大宇宙と称する。



この二項対立の図式は、^{ツチ}地の側でのみ有効。

^{アメ}天の側には及ばない。

アメ

天とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する。

という時の「ア」の領域。

物理学的に言えば、宇宙創世以前の領域。